

少人数教育の充実に向けた取組

【会津教育事務所】

学 校 名	会津坂下町立坂下南小学校
学年・教科等	第4学年・算数

タイトル

意見交流で学び合いの力を育てる

取組の内容

- 1 国語科・算数科の単元テストでは90点を目標にし、再指導・再テストを行い、基礎的基本的な内容の定着を図った。
- 2 全学級で取り組んでいる「立腰教育」を毎時間実施した。
日直児童「腰骨をシャンと立てて、よい姿勢になりましょう。」 全児童「はい。」
日直児童「黙想、始め。」 全児童で黙想。黙想は、授業の始めのみ。
- 3 算数科においては、共同研究のテーマ「学ぶ楽しさを実感する児童の育成」をめざし、同学年3人の担任で、教材開発や資料・情報交換をしながら指導を行った。また、研究の内容である「スパイラルな指導の充実」「算数的活動の充実」をめざした指導を行った。
- 4 算数科におけるT・T指導を行い、個に応じた指導・支援を行った。(重点単元)
- 5 通級指導教室(きらきら教室)において、担当教師1名が1～2名の児童に対して、国語科や算数科の個別指導を行った。
- 6 ハイパーQ Uテストを年に2回実施し、一人一人の児童理解を行うとともに、学級集団の実態を把握し、互いのよさを認め合い、協力できる学級づくりを進めていった。
- 7 町で目標に設定した家庭学習の時間(学年×10分+10分)に見合った家庭学習を全児童に行わせ、毎日、教師が目を通して称賛・指導をした。
- 8 町の幼稚園・小学校・中学校の連携事業として、「ノーテレビ・ノーゲームタイム」運動の取組や「朝食・睡眠時間等」の調査を行い、結果を家庭に伝え、家庭に生活習慣の向上を呼びかけた。

成果と課題

成果

- 1 児童が単元テスト90点を意識し、授業に集中したり、家庭学習を頑張ったりする姿が見られた。再テストを受ける児童の人数が減り、基礎的基本的な内容の定着がよくなって

いった。

- 2 毎時間、授業の始めと終わりに立腰教育を行うことで、児童が授業に集中できるようになった。
- 3 学年担任が3人いるので、算数の教具を共有したり、資料を準備したり、児童の理解度を情報交換したりして、指導に生かすことができた。「スパイラルな指導の充実」「算数的活動の充実」では、単元構想表に何時目にどんな指導・活動をするのかを明記することで、充実を図ることができた。
- 4 算数科において、重点単元のT・T指導を行った。T1が一斉指導を行い、T2がつまづいている児童に個別指導をしたり、能力別学習を行ったりした。少人数学級を二人で指導・支援することで、児童の理解度が高まり、算数の学習意欲が高まった。
- 5 普通学級にいる児童で、一斉指導ではなかなか学習が難しい児童（学習障害児童）に対して、通級指導教室担当が通級指導教室で国語科や算数科を指導した。週に2時間程度であるが、一人一人の実態に合った学習をすることで、児童は、「わかる・できる」という実感をもつことができ、保護者からも感謝の声が多く届いた。4年生は、5人の児童が一年間通級指導教室に通った。
- 6 ハイパーQUテストを5月と12月に実施した。また、同じ頃に教育相談も行き、一人一人の児童理解に役立てることができた。さらに、学級集団の実態を知ることができ、学級づくりに役立てることができた。4年生の2回目のハイパーQUテストでは、3学級とも、学級生活満足群であった。
- 7 ほとんどの児童が、「4年×10分+10分=50分」の家庭学習を一年間行うことができた。4年生は、学級の児童数が24名であり、毎日、担任がプリント・自主学習ノート、音読カードを点検し、丸付けやシール、コメント等で励ますことができた。
- 8 「ノーテレビ・ノーゲームタイム」運動の取組や「朝食・睡眠時間等」の調査を年2回行った。児童や保護者の意識が向上し、1回目より2回目の結果が向上した。

※4年生の学力テスト（2月に実施）では、国語科・算数科とも、全国平均を上回った。

課題

- 1 さらに個に応じた指導・支援を行い、一人一人の学力を伸ばす必要がある。
- 2 お互いの意見を交流し、学び合う力を育てる工夫をしていきたい。
- 3 発展的・応用的な問題を解決する力をさらに高めていきたい。



<意見の交流場面>



<個に応じた支援>